



日本植物病理学会ニュース 第44号

(2008年11月)

【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 平野 和爾



1933年1月東京生まれ。食糧難の疎開生活が農系志望の動機となる。56年千葉大園芸学部卒業。(財)日本園芸生産研究所に勤務後、58年7月千葉大助手(文部教官)に採用。卒論で線虫を扱って以来折から線虫ブームに揉まれ、数年間は線虫の防除対策に没頭した。その後植物病学

の視点から土壌伝染病における線虫と他病害との複合病問題に取り組んだ。その間、恩師河村貞之助先生並びに飯田格先生のご指導を頂戴した。66年千葉大医学部に国内留学、82年文部省長期在外研究員で米国コーネル大、カナダマックギル大等に出張した。83年線虫とフザリウム病との関係をめぐる複合病の疾病論の論文で北海道大より農学博士を取得。74年からは時代要請の煽りで、環境緑地分野への関わりが増し、緑化植物の病害や緑地生物の研究に携わる。71年講師、83年助教授、86年教授となり、98年に定年退職し、現在は名誉教授。在職中の非常勤講師として新潟大農学部で線虫学(77年以降隔年で20年間)、東京農工大大学院農学研究科で土壌伝染病特論(78年)、東京大農学部で応用動物学(83年から11年間)、北海道大大学院農学研究科で植物寄生病特論(88年)の講義を担当した。93年に「線虫と他病害との複合病に関する一連の研究」で日本植物病理学会賞を受賞した。学会関係では、日本植物病理学会の評議員、庶務幹事長、関東部会長、病名調査委員、学会報編集委員、学会賞選考委員、会計監査委員、選挙管理委員等の役職を務め、2003年に貢献者表彰を受けた。他分野でも、日本芝草学会の会長、編集委員長、評議員、顧問、第6回芝草緑化国際大会の会議運営委員長、日本線虫研究会の運営委員、編集委員、土壌微生物研究会の幹事、同学会評議員等を勤めた。国際協

力に関しては、JSPSの海外研究調査や学術振興に参画し、植物保護のプロジェクトを通して研究者の相互交流を支援した。83年以降はJICAつくば国際農業研修センターの非常勤講師として、25年間で82カ国400名近い研修生に線虫の講義と実地指導を行ってきた。著書には「新植物病理学(共著)のほか「作物のフザリウム病」,「日本植物病理学史」,「新版土壌病害の手引き」,「応用動物学実験法」等分担執筆した専門書が多数ある。植物病学における線虫病研究の一層の推進を期待したい。

永年会員 一谷多喜郎



昭和8年2月15日、滋賀県生まれ。昭和31年岐阜大学農学部農学科卒業。33年大阪府立大学大学院農学研究科修士課程終了。34～35年コロンビア国立大学農学部で教育に、36～38年ミシガン州立大学植物学及び植物病理学科で研究に従事。昭和39年大阪府立大学農学部助手、

その後講師、助教授を経て平成2年教授、3～8年は同大学付属研究所生物資源開発センター教授を併任。大阪府立大学で学位取得後、20年余り施設園芸現場のピシウム病菌及びピシウム病害の調査研究に専念。平成6年に「ピシウム病菌の生態に関する研究」で日本植物病理学会賞を受賞。また、日本植物病理学会評議員、関西部会長を歴任した。

平成8年大阪府立大学を定年退職後(財)関西グリーン研究所に移り、現在まで「芝草病の診断と防除」に取り組む。平成14年に「芝草のピシウム病の診断と防除に関する一連の研究」で日本芝草学会賞を受賞。同20年、定年後11年に及ぶ同研究所での調査・研究をまとめ「芝草の生理障害及び病害—診断と防除対策」(ソフトサイエンス社)を上梓した。

昭和31年に修士論文を始めてから五十有余年の歳月が

流れ、植物病学という一本の道を歩み続けることができた。常に自ら考えて行動し、その結果は一つ一つ報文にしてきた。この間に一事が自分で解決できた時の喜びは、何ものにも替え難いものであった。恩師、諸先学のご指導、同学の士や専門を同じくした病理学会員との切磋琢磨の賜物と深く感謝している。

日本芝草学会には、四十代後半にマイナーな分野として入会。現在ではこれがメジャーとなり、芝草病の顕微鏡診断に明け暮れている。しかし、いまだ「日暮れて、道遠し」の感が深い。一方、芝草学会評議員の1割は病理学会員で、この中の数名は現に学会長あるいは学術や学会誌編集担当の理事として活躍中。本学会は三十数年と若く、学会賞受賞者はこれまでに25名と数少ない。しかし、病理学会員による本学会賞の受賞者は2割、奨励賞に至っては実に8割を独占。これらの成果は一部「植物防疫」61巻3号(平成19年)の特集：芝草病害に集録。最後に、芝草学会は芝草病の専門家を求めている。植物病学の基礎を十分身につけた若手の病理学会員がこの関連分野へ積極的に進出、そこで大いに飛躍されんことを切に願うものである。

永年会員 佐久間 勉



昭和7年8月北海道に生まれる。昭和26年道立遠軽高等学校卒業。昭和30年北海道大学農学部農業生物学科卒業。同年9月、北海道立農業試験場病虫部に勤務。同32年5月、根室支場に転勤。当時は、日本人の食生活改善のために酪農業の拡大が図られた時期で、根釧原野に一戸20ヘクタール規模のパイロットファームが造成されており非常に活気があった。当然、飼料作物栽培の拡大に伴って病害の問題が大きくなっていった。当時、根釧原野で栽培されるイネ科牧草はチモシーとレッドトップのみでオーチャードグラスやライグラスは冬枯れに弱く栽培困難であった。土壌肥料科と共同調査の結果 *Sclerotinia graminicola* による被害が主と突き止め、防除対策を確立。ここでは、ルタバカ根くびれ病原体を *Aphanomyces raphani* と同定した。

昭和38年7月、北海道農業試験場病理昆虫部富山研究室へ転勤。ジャガイモ疫病の研究で Phytoalexine の抽出に世界の研究者と競い、リシチンを特定。当時、富山室長が言い続けた「ナンバー2には意味がない」の言葉を今も忘れない。昭和40年10月、草地部牧草第三研究室開設に伴い配置換え。同45年8月より1年間、ニューヨーク州立

コーネル大学(イサカ)植物病理学教室 Dr. Millarのもとに留学。同49年、「アカクロバ茎割れ病抵抗性に関する研究」で農学博士(北海道大学)。

昭和50年5月、果樹試験場盛岡支場に転勤。当時は、北海道、東北地域でリンゴ腐らん病が猛威をふるっていた時で、会議会議の連続でした。病害発生機構解明に一役かえたことは幸いでした。同61年4月果樹試験場病害第二研究室長。平成2年3月、同所保護部長。同5年3月定年退職。

平成5年4月以降約7年間、国際協力事業団のプロジェクトに参加。ネパールに約5年、ウルグアイに2年滞在。

平成16年、(財)報農会の協力を得て「わが国における一果物生産を阻害してきた果樹病害—その史的考察」を私費出版。

最近、世界中で食糧危機が騒がれております。日本も例外ではありません。いろいろな生産阻害要因が発生することでしょう。植物病理学研究者の活躍に期待するところ大です。

永年会員 牧野 精

ご事情により経歴を差し控えさせていただきます(事務局)。

【本学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成20年度日本植物病理学会大会は4月26日から28日にかけて、くにびきメッセ(島根県立産業交流会館)(松江市)において開催されました。会期を通して天候にも恵まれて幸いでした。今年度は中・四国地区の担当で、島根大学と島根県農業技術センターの植物病理学会員が運営委員となり会場設営とプログラム編成にあたりました。また、中・四国選出の3名の評議員の先生方(秋光和也氏、尾谷 浩氏、白石友紀氏)にも運営協力委員としてご参加いただき、3日間の各講演会場の運営にご尽力いただきました。先生方並びにご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。講演申し込みは427題、大会参加者は、名誉会員及び永年会員を含めて、約900名となり、これまでの大都会での大会と変わらない参加者と講演申し込みとなり、関係者一同感激しております。本大会では、新しい企画としてベトナム Nong Lam 大学の Bui Cach Tuyen 氏による記念講演並びに東京大学の難波成任氏と九州・沖縄農研の中島 隆氏による特別講演が総会で行われ、各氏のこれまでのすばらしい研究成果の紹介は、参加者に深い感銘を与えました。お忙しい中、話題提供していただ

きました先生方には厚くお礼申し上げます。講演発表は宇都宮大会に続きパワーポイント方式を踏襲いたしました。ご協力いただきました講演者の皆様にお礼申し上げます。

懇親会は26日夕刻、大会会場のくにびきメッセで開催され、約450名が参加されました。本田雄一大会委員長からの歓迎挨拶、次いで露無慎二新会長の挨拶の後、名誉会員の生越明先生の力強い乾杯の音頭で開宴しました。懇親会では島根県酒造組合のご協力による地酒の提供や地元の演芸団体による安来節などの民謡の披露もあり、会場は大いに盛り上がりました。植物病理学会の大会を島根県で開催するのは初めてのことであり、地方ということもあり、運営を大変心配しておりましたが、大きなトラブルもなくスムーズに進行できました。皆様のご寛容とご協力に対して改めて厚く感謝申し上げます。大会期間中にようやく田植えの始まった水田も今は稲穂が垂れて、実りの秋を迎えております。ご参加いただきました皆様有難うございました。(荒瀬 榮)

2. 平成20年度学生優秀発表賞

受賞者を下記のように決定した。

安夢楠(京大院農)「レッドクローバーネクロティックモザイクウイルスRNA2の3'UTRに存在する二つの新規なステムループ構造はRNA2の複製に重要である」

浅井秀太(名大院生農)「リポフラビン合成は植物免疫応答に関与する」

倉田智彬(名大院生農)「メロンつる割病菌とイチゴ黒斑病菌の病原性を制御する相同な転写制御因子の同定」

千秋博子(東大院農)「Potexvirus属ウイルスによるRNAサイレンシング抑制能の比較解析」

塩原泰樹(岡大院自然科学)「*Medicago truncatula* アピラーゼMtAPY1;1の機能解析」

牛丸拓磨(京都府大院生環)「アブラナ科野菜類炭疽病菌におけるアグロバクテリウム法による一重交差の相同組換えを利用した効率的な標的遺伝子破壊実験系の構築」

3. 研究会開催報告

(1) EBC研究会ワークショップ

EBC研究会ワークショップ2008が、日本植物病理学会大会前日の2008年4月25日14時から、島根県松江市のくにびきメッセで開催された。開催時期が例年と異なることや講演題数が6題と少なめであったこと等から参加者の減少が心配されたが、予想を上回る82名の参加者とそれに伴う活発な討論が行われた。

最初に石黒潔氏(中央農業総合研究センター)から、「長

期残効型水稲箱処理剤を基幹とした防除体系に穂もち防除は必要か—特にオリサストロビンについてのエビデンスメーカー」と題した講演が行われた。ここでは特に、適切なエビデンスマークを目指すために、①防除効果を評価するのにエビデンスが必要であること、②普遍的データを得ること、③防除要否のエビデンスが必要であること、④実際の圃場レベルでの試験が必要であることが示された。

次いで、小木曾秀紀氏(長野県野菜花き試験場)からは「生物農薬ベジキーパー水和剤(シュードモナスフルオレッセンス水和剤)の効果的使用のためのエビデンスマークと同剤を基幹としたレタス、キャベツ病害の体系防除」、富田恭範氏(茨城県農業総合センター園芸研究所)からは「キュウリ褐斑病防除におけるエビデンスメーカー特に、発病初期における防除の重要性」と題して、野菜関係のエビデンスマークに関する講演が、休憩を挟んで、井上幸次氏(岡山県農業試験場)からは「モモ病害の防除体系におけるエビデンスメーカー—果実の糸状菌病害を中心として—」、井手洋一氏(佐賀県果樹試験場)からは「ブドウ病害の防除におけるエビデンスメーカー九州で問題となる病害(黒とう病、枝膨病、べと病、晩腐病)を中心として」と題して、果樹関係のエビデンスマークに関する話題提供が行われ、最後に田代暢哉氏(佐賀県上場営農センター)から、「よりよいエビデンスのための統計解析のいろは—一検定からの脱却と頻度データ処理のツボ—」と題して、よりよいエビデンスを得るための統計解析手法に関する講演が行われた。

いずれの講演に対しても活発な議論が交わされ、特に総合討論では、地元島根県の農業改良普及センターの方から、普及に携わる立場での発言があり、誰でも利用可能な防除に関するエビデンス閲覧システム構築の要望等が示された。次回の山形での開催(3月25日を予定)では、さらに充実した内容の話題提供を約束して、5時間にわたる熱い議論を終了した。

本研究会では、情報提供や意見聴取を行うとともに、更なる研究会の発展を期するため、メーリングリストの充実を図っているところです。アドレス変更や新たな登録等を希望される方は、事務局(negishi@nodai.ac.jp)までご一報をお願いします。(根岸寛光)

(2) 第10回植物病害生態研究会

第10回植物病害生態研究会は、平成20年4月29日(火)に島根県松江市くにびきメッセにおいて、「病害生態研究の方法論」のテーマで開催された。参加者は91名で、内訳は大学5名、都道府県35名、独法30名、民間20名、その他1名であった。県および独法の試験研究機関からの

参加が多かったが、大学関係者、特に学生の参加が少ない傾向は従来通りであった。講演は、岩手農研の岩館康哉氏が「キュウリホモプシス根腐病の防除」、名城大学の荒川征夫氏が「遺伝的多様性と個体群構造からみた水田生息性 *Rhizoctonia* の発生生態」、京大生態研の浦野知氏が「トマト黄化葉巻病と媒介虫の個体群モデル—理論、数理モデル、データ解析—」、九州沖縄農研の中島隆氏が「作物病害の時空間分布から分かること」、中央農研事務局の石黒潔氏が「植物病害生態研究における仮説創出のための観察研究の重要性とその手法」と題してそれぞれ行った。前半3題の各テーマに関しては、生産現場の最前線で問題となっている病害を対象とした解析手法に関する講演を集めたことから、参加者の関心が高く、活発な討議が行われた。特に、浦野氏の解説した、マイルドな防除法を全て併せることで病害の基礎増殖率を伝搬閾値以下に下げ、トマト黄化葉巻病を根絶に導く戦略とシミュレーションモデルを用いた評価手法は我が国の植物病理学分野にはない斬新な考え方であった。続く2題は生態研究の基本的な研究手法や考え方に対する講演を古参の幹事2名が行った。ランダム、集中、一様という空間分布の様式は病害の伝染源が何か、どこから来るのか、どうやって広がるのか等の病害防除に直接役立つ多くの情報を与えてくれることを麦類赤かび病での研究例を基に紹介された。議論では身近にいる害虫生態研究者との共同研究が勧められた。最後の講演では、優れた仮説創設の方法としてアブダクションの推論の仕方が解説された。議論では、「驚くべきことに」をキーワードとして学会発表のイントロを作ると良いとの意見と、驚くべき事実を観察する目とそのための教育について意見が交わされた。本研究会は植物病害の生態を研究する若手の研究者が相互交流することを目的に、20年程前に始まった会で、12年前から学会に正式に認知された研究会として活動している。現在、学会大会の運営方法の改革に併せて本研究会のあり方を大幅に見直す方向で議論を進めている。ご意見のある方は代表幹事の中島（九州沖縄農研）ntakashi@affrc.go.jp までお知らせ願いたい。（中島 隆）

(3) 第18回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会では、第18回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムを平成20年4月29日くにびきメッセにて開催した。学会大会終了後の休日にもかかわらず、大学や独立行政法人および公立の試験研究機関、農薬メーカー、農業者団体など、殺菌剤耐性菌に関心をもつ約130名の参加のもと、講演と熱心な討議が行われた。

演題は、「島根県における薬剤耐性菌の発生事例」／塚本俊秀（島根県農業技術センター）、「ジャガイモ疫病菌等

のフルオピコリド剤感受性の検定法とモニタリング」／久池井豊（バイエルクロップサイエンス株式会社）、「Resistance risk assessment for mandipropamid and other CAA fungicides」／Ulrich Gisi（Syngenta）、「Mode of action, biological performance and latest monitoring results of boscalid sensitivity」／Gerd Stammer（BASF）、「茨城県におけるボスカリド剤耐性キュウリ褐斑病菌の発生」／宮本拓也（茨城県農業総合センター園芸研究所）、「MBI-D剤耐性イネいもち病菌の発生推移—栃木県—」／小林泰弘（栃木県農業環境指導センター）、同タイトル—佐賀県—／山口純一郎（佐賀県農業試験研究センター）の計7題であり、いずれの講演も、殺菌剤耐性菌の発生による被害回避や防除対策の構築に大いに参考になるものばかりであった。

また、殺菌剤耐性菌研究会では、殺菌剤耐性菌の発生による被害回避を目的としたマネジメントの提案を使命の一つと考えているが、今回はじめて、MBI-D剤及びQoI剤に関して「イネいもち病菌における殺菌剤耐性菌マネジメント」を提案した。MBI-D剤は、イネいもち病に対して高い防除効果を有するものの、耐性菌の発生により防除効果が大きく低下し、実際に被害も発生した。QoI剤もイネいもち病に高い防除効果を発揮する薬剤であるが、同時に耐性菌の発生リスクが高い薬剤でもある。このため、同剤の耐性菌の発生による被害を回避し、優れた効果を持続させるためには、MBI-D剤の教訓を活かしたマネジメントが必要と考え、MBI-D剤及びQoI剤に関する使用ガイドラインとその徹底について述べた。提案後、質疑応答が進むなか、マネジメントの有効性の把握や現場への普及手段の検討といった課題が残っていること、関係者が一体となった取り組みが重要であることなどを確認し、盛会のもと第18回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムを閉幕した。

（宗和弘）

(4) 第9回植物ウイルス病研究会

今年の日本植物病理学会大会は例年に比べ約1か月遅れの4月26日から28日まで松江で盛大に行われた。その翌日に倉敷で第9回植物ウイルス病研究会が開催された。通常、大会と同じ場所で開かれるこの会であるが、今年度は講演者、座長の皆様には松江から倉敷までの移動（特急やくもで2時間弱）で御足労をおかけした。この会では新たな試みを2つ行った。1つ目は国際型のシンポジウムとした点で、2つ目は集会のタイトルを「植物ウイルスとマイコウイルスの接点」とし、話題を植物ウイルスに限らず、菌類ウイルスに広げた点である。

1つ目に関しては講演者8名の中で外国人招待講演者3名 Nuss 博士（UMBI）、Roossinck 博士（Noble Founda-

tion) Kim 博士 (SNU) の他 2 名の日本人講演者 (愛媛大; 西口先生: 北農研; 松本博士) が英語で格調高い講演をされた。日本語による講演 (岡山大の近藤博士, 中央農研の清水博士, 京都大学の三瀬博士) も最先端の内容で聴衆を引き付けた。清水博士は, 講演内容もさることながら TV のサイエンスプログラムに出てくるような動画を使っている講演で聴衆を魅了した。詳しい発表内容は第 9 回植物ウイルス病研究会レポート (大阪府立大の大木博士あるいは岡山大の鈴木から入手可能) を参照されたい。どのシンポジウムでも, 良い講演が聴けて, 活発な議論を通じその話題についての理解を深めるのが大きな目的と考える。国際型シンポジウムでは議論が活発に行われるかどうかはオーガナイザーが頭を痛めるところと思う。しかし本シンポジウムではそのような懸念は杞憂に終わった。どの講演でも質疑応答が活発に行われた。座長の中屋敷博士 (神戸大), 笹谷博士 (中央農研), 大島博士 (佐賀大), 森山博士 (農工大) には心より感謝申し上げます。

2 つ目の新しい試みは開催地倉敷と深く関係する。小生は岡山大学に移管された附置研究所「資源生物科学研究所」に属す。今でこそ「資源生物科学研究所」という名称であるが, しかし, その前身は大原孫三郎氏 (大原美術館の創設者) によって 1904 年に設立された財団法人大原奨農会農業研究所である。その後, 岡山大学農業生物研究所, 資源生物研究所と 2 回の大きな改組を経て, 現在に至る。前置きが長くなったが, 農業生物研究所初代所長の西門義一博士 (植物病理学者) は本シンポジウムの招待講演者の一人 Nuss 博士が研究材料とするクリ胴枯病菌の調査を 1960 年代に行っており, 必ずやハイポウイルス (宿主菌の植物に対する病原性を弱めるマイコウイルス) に感染したクリ胴枯病菌を観察されていると思われる。また, 井上忠男博士 (農業生物研究所から大阪府立大へ転出) は植物ウイルス学の権威あることは言うまでもないが, 多数のマイコウイルスも植物病原糸状菌細胞中に観察されている (私信)。また, 小生の前任者の玉田博士はカビ伝搬性植物ウイルスで大きな業績を残されている。このような背景の中で, 「植物ウイルスとマイコウイルスの接点」と題したシンポジウムをここ倉敷で開くことができたのは意義深いと考える。

サテライトのサテライトとも言うべきワークショップについて紹介したい。今回は植物病理学会, 大原奨農会, 岡山工学会の御支援を頂き, マイコウイルスの分野において第一線で活躍されている研究者を招聘することができた。この機会を利用し, 第 9 回植物ウイルス病研究会翌日の 4 月 30 日, 5 月 1 日と倉敷鷺羽ハイランドホテルで第一回国際マイコウイルスワークショップを開催した。日

本の 9 研究室, 外国の 3 研究室から合計 15 題の講演申し込みがあり, こちらも賑々しく行われた。3 年後は国際ウイルス学会にあわせ札幌で第 2 回国際マイコウイルスワークショップ「Mycoviruses: Virocontrol, mutualism, and neutralism」が開かれる予定である。

最後に, 講演者, 座長の皆様, 倉敷までお越し頂いた聴衆の皆様, 本会の運営にあたってくれた岡山大学植物/微生物相互作用グループの諸氏に感謝申し上げます。第 9 回植物ウイルス病研究会を終えて=松江から倉敷へ=

(鈴木信弘)

(5) 第 44 回植物感染生理談話会

平成 20 年度の植物感染生理談話会は「ゲノム情報を活用した植物感染生理学の展望」を主テーマとして, 8 月 7 日 (木) ~ 9 日 (土), 茨城県大子町の余暇活用センター「やみぞ」にて開催された。参加者は 81 名であった。まずイントロダクションで, 植物病理学の分野において分子生物学的手法が今後どのように用いられていくのかについて, 「分子植物-病原体相互反応研究の動向」と題して秋光和也氏に話題提供していただいた。第 1 部では, 近年目覚ましい発展を遂げているゲノム情報の解析に焦点を当て, 微生物と植物それぞれの領域について, 西村麻里江氏に「真核微生物ゲノム情報を活用したイネいもち病菌感染シグナル伝達経路の解析」, 古谷綾子氏に「ゲノム情報を利用したイネ白葉枯病菌の植物感染機構の解析-病原性に関するタイプ III エフェクターの同定-」, 須賀晴久氏には「ゲノムの全塩基配列を利用したムギ類赤かび病菌の研究」をご紹介いただいた。農業生物資源研究所の河内宏氏に特別講演「モデル植物を用いた植物-微生物共生研究の最近の進歩」をお願いし, マメ科植物ミヤコグサと根粒菌との共生について学んだのち, 懇親会ではさしみコンニャクや久慈川で獲れた鮎の塩焼きなどを賞味した。2 日目は長谷修氏に「マイクロトマトのゲノム情報を活用した *Pythium oligandrum* による誘導抵抗性の分子機構解明」, 高辻博志氏に「イネの誘導抵抗性に関わる分子機構の解明とその利用」を, また福岡修一氏には「イネいもち病菌圃場抵抗性に関する QTL の検出とその遺伝子単離」のご講演をお願いした。次いで第 2 部の各論に移り, 細菌関係の話題として宮田伸一氏に「カンキツグリーンング病ゲノムの高度変異領域の系統間比較から見た病原性変異や分布地域との関連性」, 田村勝徳氏に「アブラナ科野菜黒腐病菌の感染戦略」, 一瀬勇規氏には「*Pseudomonas syringae* の MAMPs と植物応答」のご講演をいただいた。午後には, 頭の疲れを癒すべく, 日本三大瀑布の 1 つ, 袋田の滝へエクスカージョンに出かけたのであるが, 健脚向きのコース (?) に挑戦

した人も多く、却って疲労を招いたかも知れなかった。それでもそのあと、24枚からなるポスターの前では活発な議論の光景が見られ、さらにイーブニングディスカッションでは「ゲノム」、「抵抗性」、「バクテリア」、「ウイルス」の4グループに分かれて、ビールを飲みながらの熱気を帯びた自由討論が続けられていた。最終日はウイルス関連の課題に移り、望月知史氏に「メロンえそ斑点ウイルスによる「えそ」の誘起機構」、山次康幸氏に「タバコモザイクウイルスの複製・移行に関わる宿主因子」をお話いただいた。会の締めくくりは糸状菌関係の話題で、曾根輝男氏には「イネいもち病菌の非病原性遺伝子*AVR-Pia*のクローニングと解析」、竹本大吾氏には「牧草共生糸状菌の感染確立機構」、そして中屋敷均氏には「RNAiによる病原糸状菌の機能ゲノミクス」のご講演をいただいた。ポスターの優秀発表賞には岸本久太郎氏ほかの「キチン受容シグナルをHR細胞死誘導シグナルに変換するキメラ受容体創出の試み」と、浅井秀太氏ほかの「リポフラビン合成は植物免疫応答に関与する」が選ばれた。今回は15年ぶりに茨城県で本談話会を開催させていただいた。過去2回のつくば市を離れ、山あり川あり、そして滝ありの奥久慈、大子温泉でまさに「夏の学校」の雰囲気味わっていただければ……そのような思いで企画させていただいた。皆様の思い出に残るものとなっていただければ幸いである。なお、来年度の談話会は北海道大学が担当して開催されることが了承された。

(石井英夫)

(6) 第5回教育プログラム

第5回教育プログラムは、9月8日から12日の5日間、鹿児島大学農学部において開催された。本学会関係の全国に向けた催しを本学で行うのは久しぶりで、この本土最南端の鹿児島市にどれだけの参加者を集めることができるかと、当初は不安であった。しかし、今回から、募集枠を非会員に拡大したことが功を奏し、定員には満たなかったものの、全国各地から20名の受講者を集めることができた。参加者の内の10名が非会員であったのである。参加者の職種は、国・県の試験研究機関から10名、種苗・農薬会社など民間企業から7名、大学から3名(大学院生1名)であった。

今年は8月末に国際植物病理学会があったため、開催時期を例年よりも遅らせたが、この時期に懸念される台風の到来がなく天候に恵まれた5日間であった。ただ、残念なことに、やはり台風の接近によって、終了直後の週末から天候が崩れ、延泊して鹿児島観光を楽しみにされていた受講者には、大変お気の毒であった。

今回は九州部会としての特色を出すことに主眼を置

き、学内での実習は、「ナス科植物青枯病細菌の分離・培養・接種と特性評価」(土屋健一・古屋成人)、「免疫学的手法による青枯病の診断」(古屋成人・土屋健一)、「遺伝子情報に基づく青枯病細菌の系統解析」(津野和宣・松元 賢)、「Tissue print法によるキュウリモザイクウイルスの診断」(竹下 稔・大島一里)、「植物ウイルスの分子系統解析と分子進化的解析(講義)」(大島一里・竹下 稔)、「イムノクロマト法による果樹ウイルス病の診断とRT-PCRによるウイロイド病の診断」(草野成夫・竹下 稔)、「罹病植物体からの糸状菌の分離・培養と接種」(中村正幸・松元 賢)、「植物ベイツィング法による土壌からの糸状菌の分離」(松元 賢・中村正幸)、「Dip法による試料作成と電子顕微鏡観察」(荒井 啓・中村正幸)、「LAMP法によるHLB(カンキツグリーニング病)の簡易診断」(奥田 充・河野伸二)、「ICAN法によるHLBの簡易診断」(河野伸二・奥田 充)の内容で実施した。また、今回は、4日目に、野外研修として、鹿児島県農業開発総合センターの関連施設を見学した。最初に南九州市知覧町の茶業部にて「鹿児島県におけるチャの病害発生の特徴と対策」の講義(富濱 毅・野中壽之)を受けた後、チャもち病の激発地を見学、知覧武家屋敷群での昼食の後、南さつま市金峰町のセンターに向かった。ここでは、「生産環境部病理昆虫研究室の主な研究課題」の講義(尾松直志・野島秀伸)を受けた後に、場内にてイネ縞葉枯病や紋枯病などの水稻の主要病害(新屋敷生男・西 八東)や、イチゴ炭疽病と輪斑病の見分け方(尾松直志)など、罹病植物を見ながら説明を受けた。

この日の晩は、鹿児島中央駅近くの割烹で、最終日の講師やセンターの他の部署の研究員を加えた30名を超える参加者で、お別れ会を催した。初日の懇親会で受講者を戸惑わせたビールは乾杯だけで、後はひたすら「焼酎飲み放題」で杯を重ねるといふ鹿児島方式であったが、4日目と



もなると、さすがに全国各地の酒どころからみえた参加者が酒豪振りを披露し、結局のところ、一番初めに正気を失ったのは実行委員代表者であつたらしい。記憶が定かでないのであるが、不適切な言動についてはこの誌面上にて陳謝します。

終了後のアンケートでは「植物病理に関する概論から病原体の同定に関する最新技術について広く学ぶことができた」、「糸状菌、細菌、ウイルスについて幅広く、PCR、ELISA、API-20、分離法など、診断に欠かせない技術のポイントを教えてもらうことができて良かった」、「日頃基本過ぎて聞きづらい質問が気軽にできた雰囲気良かった」、「講師の先生方の話が大変面白く貴重な経験になった」など、今回も概ね満足されたようであった。その一方で、「内容が盛りたくさんで理解する時間が少し足りなかった」、「多くの実験を並行して行ったために、準備段階の作業を忘れがちになり、方法と結果を結びつけ辛いことがあった」、「2週間くらいかけて、もう少しゆったりと、実験や受講ができればと思った」、「もう少し、実際の病害や、糸状菌、細菌などの観察ポイントを紹介してほしいかった」などの意見があり、改善すべき点も多かった。確かに、主催者には、この機会に九州管内の研究者を講師として多く結集したいという意図が強かったあまりに、テーマを欲張り過ぎた感は否めない。もっとテーマを特化するのも一案と考える。意外であったのが、電子顕微鏡を触るのが初体験という受講者が実に3分の2を超えていたことで、荒井名誉教授による実習は、異様な盛り上がりを見せ、タバコモザイクウイルスやイネ萎縮ウイルスの載ったシートメッシュを大切に持ち帰る受講者が多かったのには驚いた。今後のプログラムの参考になる光景であった。多少時代を遡るようで、賛否はあると思うが、分子生物学中心の時代だからこそ、「電子顕微鏡によるウイルス粒子と罹病組織の観察」とか「光学顕微鏡による糸状菌の形態観察」といったクラシカルな2、3のテーマのみに絞るプログラムの有り方もあるのではないだろうか？

今回の教育プログラムの実施に当たっては、土屋健一氏、古屋成人氏、大島一里氏、竹下 稔氏、尾松直志氏、中村正幸氏の皆さんに実行委員としてご尽力いただいた。講師を快くお引き受けいただいた先生方、終始バックアップしていただいた鹿児島県農業開発総合センターの畏友諸氏も含めて感謝する次第である。(岩井 久)

4. 部会開催報告

(1) 関東部会

平成20年度関東部会は9月13日(土)、14日(日)の

2日間にわたり、日本大学生物資源科学部(神奈川県藤沢市)で開催された。参加者数は名誉・永年会員4名、一般会員110名、学生会員87名の計201名であった。講演題数は37題で、その内訳はウイルス病9題、細菌・放線菌病8題、糸状菌病16題、宿主反応関係4題で、活発な質疑応答が行なわれた。本年度は例年に比較して講演題数がやや少なかったが、講演内容は多彩であった。開催初日の昼の休憩時間に役員会が開かれ、21年度の関東部会は引き続き日本大学で開催することが了承された。また、平成22年度以降の部会開催地、開催時期等部会運営に関する話し合いが行なわれた。初日の夕刻にはキャンパス内の食堂棟で懇親会が盛大に行なわれ、会員相互の親睦が大いに深められた。また、2日目の講演終了後には第6回若手の会が開催され、森脇明弘氏(独立行政法人 農業生物資源研究所)、早川敏広氏(株式会社 理研グリーン)、三中信宏氏(独立行政法人 農業環境技術研究所)を講師に迎え、活発な討議が行なわれた。

日大湘南キャンパスは小田急江ノ島線六会日大前駅から徒歩3分のところにあり、東京、新宿からの所要時間は約1時間で交通の便が良いこと、キャンパス内に視聴覚設備の整った500名収容の大講堂、専用の懇親会場を所有しており、参加者からは好評を得ることができた。部会開催にあたりご協力いただいた会員諸氏に感謝申し上げる。来年度も日大で部会を開催することを予定しており、より多くの参加者、講演申込を期待しております。(前田孚憲)

(2) 関西部会

平成20年度関西部会は9月18日、19日の2日間にわたり和歌山ビッグ愛にて開催され、参加者は約200名であった。総講演数は79題で、内訳は糸状菌関連49題、細菌病関連11題、ウイルス関連10題、植物保護関連9題であった。部会運営は、開催地委員長の吉本均氏、幹事の増田吉彦氏および実行委員を中心に、関係各氏のご協力により準備され、会期全般を通して活発な討議が行われた。18日の講演発表終了後、同会場にて懇親会が行われ、和歌山の夜景を眺めながら、参加者相互の親睦を深めることができた。部会役員会は18日午前中に和歌山ビッグ愛会議室で開催され、児玉基一郎事務幹事の進行で、役員交代、庶務・会計報告、次年度の開催計画等が審議・了承された。また、平成21年度の部会は、開催地委員長土佐幸雄氏、幹事中屋敷 均氏により、兵庫県神戸市の神戸大学で開催される旨が了承された。これらの審議・了承事項は、同日午後部会総会においても報告され、了承された。総会終了後には、部会長(尾谷浩)講演「宿主特異的毒素：構造、生産および作用における多様性」があった。(尾谷 浩)

【会員の動静】

- 日比忠明 H20. 4 法政大学 生命科学部 植物医科学専修 教授
西尾 健 H20. 4 法政大学 生命科学部 植物医科学専修 教授
鍵和田聡 H20. 4 法政大学 生命科学部 植物医科学専修 助教

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11

日本植物防疫協会ビル内
学会ニュース編集委員会
FAX：03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏，寺岡 徹，築尾嘉章，竹内妙子，笹谷孝英 各委員宛

編集後記

学会ニュース第44号をお届けいたします。本号では、先ず今年度選ばれた名誉会員・永年会員のご紹介とそれらの方々からのメッセージを掲載しています。これらの新名誉・永年会員の方々の長年にわたる学会へのご貢献に対し心から感謝いたすとともに、国内外での幅広いご活躍に敬意を表したいと思えます。皆さん現役を退かれた後も講演・講義や執筆活動でご活躍中ですが、メッセージの中にも貴重な経験や熱い思いが語られております。後は、学会活動報告が続きます。今年度の大会は島根大学で開催されましたが、地域での開催にもかかわらず参加者数が約900名にのぼり、盛会裏に終了することができました。事務局の島根大学の先生方、また近畿・中国の運営関係者の皆様、大変お疲れさまでした。この大会のほか、部会、談話会、研究会いずれも順調に開催され、活発な活動が継続しており、同慶の至りです。

本会ニュースは身近な情報も気軽に交換することをモットーにしておりますが、毎号ルーティンのパターンになりがちですので、皆様からの活発なご投稿を期待しております。
(加来久敏)
